

「春の小石川植物園(8)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

小石川植物園の中には「標本木」を集めた区画がある。まさに「生きた植物図鑑」と言って良いだろう。草本(草花)も木本(樹木)もあり、特に今の時季はいくら見ても飽きない。その中にひときわ目をひく白い花が咲いていた。



こちらは「アゼビ」*Pieris japonica*の花である。やはり春先に鈴なりの白い花をたくさんつける。アゼビは漢字では「馬酔木」と書く。これは、葉にグラヤノトキシン(Grayanotoxin)という神経毒を持ち、馬が食べると麻痺に似た症状を示すことに由来する。馬だけでなく、多くの草食獣に毒性を示す。奈良公園にアゼビが多いのは、鹿が食べないので増えたからだという。



これは「ミツマタ」*Edgeworthia chrysantha*である。落葉低木で、早春から春にかけて、葉が出る前に花だけを咲かせる。遠目には、枯れ木に綿をまとったように見える。ジンチョウゲ科に属するというが、当のジンチョウゲは常緑樹で、花もまったく似つかない。



この日はよく晴れた土曜日で、たくさんのグループがお花見を楽しんでいた。私も桜だけでなく、さまざまな植物を観察できて、勉強になった。



ミツマタは漢字では「三叉」または「三枝」と書く。名の通り、枝が必ず3つに分岐する。上の写真でも下のほうで3分岐した枝が、右上の花の手前でまた3分岐している。この形状はフラクタルの一例とも言えるだろう。ミツマタはコウゾ(楮)と並んで、和紙の原料として重要な植物だ。



帰りの播磨坂の桜並木は、夜桜になりかけていた。